

## 会 議 録

|        |   |
|--------|---|
| 会議の名称  | 令和3年度第3回富士見市社会教育委員会議  |
| 開催日時   | 令和3年10月13日(水) 午後7時00分～8時00分   |
| 開催場所   | 中央図書館 視聴覚ホール  |
| 出席者    | 古澤立巳議長、佐々木真理子副議長、京谷恵子委員、<br>吉田徹子委員、蘇武伸吾委員、渡邊知広委員、吉田和江委員、<br>内海幸一郎委員、富士伸委員、事務局 |
| 欠席者    | 荒川照子委員  |
| 公開・非公開 | 公開(傍聴人 0人)  |
| 会議次第   | 1 議長あいさつ<br>2 協議事項 第33期のテーマについて<br>3 その他                                      |
| 会議資料   | 定期刊行物   |
| 会議録確認  | 古澤立巳議長  |

## 会議内容

### 1. 議長あいさつ

### 2. 協議事項 第33期のテーマについて

【議長】 前回会議の内容について事務局でまとめてもらい、委員に事前配布してもらっている。まずこの資料について、事務局から説明を。

【事務局】 資料に基づき説明

【議長】 前回出席いただいた委員各位に、第33期のテーマ案としていくつかご提案いただき、事務局にまとめてもらった。ここにさらに付け足しや質問があればお伺いしたい。

【委員】 子どもと関わる仕事に就こうとしている学生と関わる中で、子どもの貧困が話題になっていると感じる。またその中でも、ひとり親世帯の貧困は大変厳しい状況にある。しかし一方で、地域の方で子どものサポートをしてあげることで、子どもの自己肯定感が高まるのだ、という話もあり、これからはそういった子どもへのサポートが必要だと学生と話している。この問題は、事前に挙げていただいたテーマ案のどれにも当てはまるものかと思う。新しい時代に向けた体制づくり、子どもの貧困や、ひとり親世帯をバックアップできる体制、なおかつ時間や距離に捕らわれない、ICTを活用した体制について検討できれば。

【委員】 事務局から提示された8番目のテーマ案「コロナ禍における生涯学習活動のオンライン化について」については、今まさに取り組んでいく価値のあるものだと考えるが、しかし提言書としてまとめた1年半後に、話題として遅れたものになってしまわないか不安が残る。したがって、8番目のテーマについて取り組むのであれば、この33期の前期の内にやるのがよいのではないか。

【委員】 事務局から配布された資料などを確認したが、高齢者の方の活動は活発だと感じた。子ども向けの企画やイベントも多くあり、充実している。その中で、やはり40代、50代の活動は少なくつながりは希薄なのではないかと考える。したがって、3番目に挙げられているテーマ案「40～50代の地域への帰属意識の低下の原因はなにか？」や、5番目に挙げられているテーマ案「世代間のつながりの醸成方法」について、私自身40代であるということもあり、関心がある。また「住みよいまち」、「安心して暮らせるまち」であることを望むものの行政に丸投げして自分達はなにもしておらず、地域の一員としての自覚が薄い。世代間のつながりや地域への帰属意識があった方が住みやすくなるのではないかと思う。またコロナの影響で子どものイベント等も減っており希薄化は一層進んでいる。収入を得るためだけのつながり以外にも必要なつながりがあるのだ、という事を広く知って貰える方法を検討していければ。私の勤め先のスタッフも若い世代だが、知りたいことはスマートフォンで検索すれば済んでしまうので、興味のないことは全く知らない。個々をつなぐ仕組みを考えていければと考える。

【議長】 31期、32期とハイティーンなどの若い世代を対象にしてきた。委員

に仰っていただいたように、次は40代、50代の生涯学習について、地域との関わりについて焦点を当てて研究するのも良いと思う。

**【委員】** 今活発に活動されている高齢者の方は、もう少しお若い頃から活動されていたのではないかと思う。30代から50代の方は活力はあるものの様々なものが身の周りがあるので、地域活動以外のものに目が向いてしまっているのだと思う。その、他に向いてしまっている目を、いかに地域活動に向けてもらうかが社会教育だと考える。興味を持ってもらう機会や場が不足しているのではないだろうか。今回事前配布資料で、出されたテーマ案が生涯学習推進基本計画などに関連付けて説明されていた。私自身、公民館でいろいろな活動をしていた時に、社会教育課から生涯学習課に変わった。「社会教育」と「生涯学習」で何が違うのか、ずいぶんと話し合った時期があった。私たちは社会教育委員なので、生涯学習とは切り離して考えるべきだろうと考える。第3次生涯学習推進基本計画などを読んで感じたのは、生涯学習は、どこかで誰かがやってくれているのを、聞きに行く、見に行く、という姿勢しか見えないこと。しかし私が学んできた社会教育は、社会の中での課題を自分たち自身で見つけて、自分たちで課題解決に向けて行動するというもの。私の上の世代の方たちはまさにそういうことをやって自分たちの生活を見直し動いてきていた。私はそれを、自分がついていく立場でもいいし、誰かを助ける立場でもいいので、やりたいという思いがずっとある。この世代は教える方、この世代は受ける方、ではなく、みんなで取り組まなければいけないこと。いま40代、50代の方たちの話があったが、その世代の中で、自分たちには何ができるだろうか、と考える人が増えることが大事なのではないか。

**【事務局】** 誰しもが時には教育者、時には学習者、ということか。

**【委員】** 「生涯学習」の「学習」という言葉に捕らわれすぎている。誰かに何かを教えてもらって学ぶのではなく、自分が力をつけてなにかをできるようになっていかなければならないと思う。なにもないところから生み出す、そのために上の世代や下の世代を巻き込みながらやっていくことが必要なのではないかとずっと考えている。私は私の世代でできることをして、上の世代から学ぶし、下の世代を巻き込む。その上の世代の方もだんだん亡くなる方が増えているし、下の世代も忙しくて動けないし、となると、絶対にどこかでつながりは切れてしまう。その現状をどうにかできないかと考えている。私は、自分が発信するということも含めて生涯学習だと考えているのだが、その考えが欠けているのではないか。生きていく社会の中で学び取るという事も欠けているかもしれない。社会教育の立場からその必要性を指摘できないか。もちろん、みんなが学ぶ事はとても大切で、否定する気はない。しかし誰かに何かを教えてもらっておしまい、ではないと思う。社会教育との違いはそこではないか。自分で課題を見つけて、そのために教えてもらうことはあっても、自分が学んだことを人に教えることもあるわけだし、そういう学び合いのようなものが、人々の中から失われてしまったように感じる。

**【議長】** 今の話は、3番目のテーマ案や5番目のテーマ案と関連して、その世代

の生涯学習のあり方について検討するということか。

【委員】 つながっていくもの。しかし講座等にどうやったら参加してもらえるか、だと、そこで終わってしまう。そうではなくて、社会の中で大人として生きていく時になにかしら考えているはずであるから、それをどうやって形にして発信し、人とつながっていけばいいか、ということを考えるべきではないか。そしてそれは一人で考えるのは難しいことだと思うので、上の世代から学び、下の世代の人を巻き込み、そのようなつながりを提起できれば。

【議長】 どのテーマになっても関わってくる視点だと思う。テーマが決まった段階で、今あったような意見を深く掘り下げていくことも可能かと思う。

【委員】 32期でテーマとした子ども教室の中で、水谷東小学校区の子ども教室は令和2年度で一旦休止した。その要因としては、次の世代にうまく引き継げなかったということが一番大きい。私自身は20代の子どもがいる母親であるが、上の世代の方たちが作り上げてきた子ども教室に、後から参加し一緒に協力して活動した。当然次の世代も同じようについてきてくれると思っていたが、「仕事をしているからできない」という人たちが多く、新しい担い手が現れない状況が何年か続き、一旦休止という形になった。したがって3番目に挙げられているテーマ案には興味がある。休止した後にコロナが流行したが、学校評議員の会議に出席した際に校長先生から、PTAの役員等も嫌がっていた大勢の保護者の方たちだが、放課後の消毒のお手伝いを募集してみると、多くの方が協力してくださったというお話を聞き、感動した。町会の集会所で行なっていたイベント等も、今は感染対策を講じた上で月に2回開催しているが、覗いてみたところ、今までは子どもを預けるだけで丸投げしていた保護者の方が、今は子どもと一緒に遊んでいる。なぜ活動を次世代へと繋いでいってくれないのだろう、という思いがあったが、いざ自分たちが何かやらなければ子ども達が可哀そうという状況になった時は、動くんだなと感じた。また全く時間を作らない親と、忙しくても何とか時間を作る親と両方いて、親なのに子どもへの接し方が分からない、という人がある。しかしやはり子どもは寂しさを感じていて、子ども教室などで会う大人に甘えてくる。親だけではなく、みんなで子どもを育てるという意識が育めるような、良い方法を見つけていければと考える。また何かあった際に自分たちで動ける若いお母さんたちはいるわけなので、上手く活躍の機会を設けていけないだろうか。

【委員】 公民館などで活動している団体を見ると、やはり高齢化しており後継者がいない。例えばふじみ野交流センターで、勝瀬地域の伝承活動を行っている勝瀬昔承会という団体がある。とても意義ある活動をしている団体であるが会員はみんな80代、今後活動を継続していけるのか不安がある。もう少し下の世代の人たちを巻き込んでいければ活動しやすくなるのではないだろうか。また市民大学やコミュニティ大学においても、運営を担っているのは高齢者の方が多い。代表の方たちがいなくなってしまうと、その下の世代の人たちに担ってほしくてもなかなか参加してもらえず、活動を継続していくためにも、世代間のつながりはとても大

切なもの。周りの様子を見ていると、どうしたら世代間のつながりを築いていけるのか、考えていくことは重要だと考える。

【委員】

私は学校で勤務しているので、ここで挙げられたテーマ案の中では、やはり子どものつながりであるとか、その親である世代のつながりといったものに目が行ってしまう。本校においても多くの地域の方にご支援いただいているが、やはり同じように高齢の方が中心で後継者が見つからない、と言う声は聞こえてくる。地域活動を担う次世代をどうしたら確保できるか。例えば登校指導をしているときに、通行している地域のみなさんにも声をかけるが、高齢者のみなさんは「おはようございます」の後に必ず「ご苦労様です」や「ありがとうございます」をつけてくださる。ところが、私と同じような年代の方や、それより下の年代の方は、挨拶を返してくれたりお辞儀を返してくれたりすればいい方で、何の反応もなく通り過ぎる方も少なくない。ご自身が子どもの頃、また現在に至るまでに地域とのつながりや、地域から得るものがどれほどあったか、その差が出ていると考える。自分も地域のために子どものためになにかできるかな、と考えてくださっている方は、地域活動がどのような効果があるのか、どのような地域の繋がりを築けるのか、イメージされているのだと思う。子どもが少なくなってきた中で、地域でイベント等開催しても参加者が伸びない、またそういったイベントに子を送り出す親が少ない、となると、子どもたちにとって地域の人に守られ様々なことを教えてもらっているのだという事を、実体験をもとに感受しなくてはいけない時期なのに、それができていない。なるべく学校教育の中では、様々な人に支援していただいているのだという事を伝えながら、その時に自分たちがどういう風に感謝の気持ちを届けられるか、考えさせながら取り組んでいる。しかし、理想的な循環は学校、家庭、そして社会の連携がとれていること。学校と家庭とのつながりは作れても、そこに地域社会も、となると難しい。学校開放を利用して本校の施設を使っている団体の方もいるが、学校とのつながりがどれほどあるかと言うと、ほぼなく、場所を貸しているだけ。子どもたちと、そういった団体のみなさんを結び付けるところまではいかない。どうしたらつなげられるのか、そのつなげる役割を担うのはどこなのか。そこがつなげられた時に、その子どもが大人になった時に、学校や地域からの呼びかけに応えようかな、と思う人間になるのではないか。まずその人が地域との関わりの中でどれほどいい思いをしてきたか、よい事例がどれほどその人の中にあるか、そこを育てていかなければならない。しかし、子育ても仕事もある中で、そういった呼びかけがあったとしても応える余裕はなく難しいのではないだろうか。そう考えると、いかに気軽に都合よく、ローリスクハイリターンな場がそこにあるか、ということも考えなければならぬのではないか。少なくとも、自分の子どもが参加しているという活動であれば、保護者自身も参加しやすくなる。参加したからといってなにか役員を無理やり担わされるようなこともなく、なんとなくやってみたら気持ちよかったな、また都合のいいタイミングで声がかかったらやってみようかな、くらいの余裕を残してもらえるような形で取り組んで

いけないだろうか。PTAも強制じゃないかなどと話題になるが、もちろん本校も強制ではなく任意の活動であって、それもPTAの方と協力して、都合のいい時に参加してもらって、興味があったらまた参加してもらって、という気軽に参加できる形にシフトチェンジした。ただし、その人の都合のいい時に情報が入ってくるように、情報発信をしっかりとしていかななくてはならない。また、やってくださったことが、子どもたちにどれほど還元されたか、ためになったか、しっかりと伝えることも重要で、なおかつ、子どもたち自身の口から感謝の気持ちを伝える機会を設けることも大切。いろいろと模索しながら学校では実践している所だが、学校、家庭、地域、三者のつながり・連携を創出できるような提言ができれば、学校現場のものとしてはありがたい。

【委員】 ふじみ野地域などはベッドタウン化して、まさに「埼玉都民」というにふさわしい。地区社協もない、子ども会もない、PTAも特殊。駅周辺地域と、例えば南畑地域なんかを比べると、富士見市に対する気持ちの入れ込みようが全く違う。「埼玉都民」と言われるような方々を見ていると、隣近所と交流しようとか、地域で交流しようという感じではなくて、自分の趣味などに打ち込み、そうして充実した日々を送られているのではないかなと思う。もともとその地域にいた方と、新しく住むようになった方たちと、もう少しうまく融合できるような取組が必要なのではないか。目を引くイベントで地域に出てきてもらって、殻を破ってもらって、新旧がうまく融合した地域が醸成出来たらいいなと思う。できているところもあると思うが、駅周辺は個がしっかり形成されているので、難しい。選挙などもみていると取組方が全然違う。もうちょっとみんな仲良く手を携えることはできないものだろうか。

【議長】 出されたテーマ案がだいぶ絞られてきたのではないか。例えば3番目のテーマ案や5番目のテーマ案にどう迫っていけばよいか、については、各委員から伺った意見の中に随所に見られたと思う。子育て世代の問題や、地域との繋がり的问题、生涯学習という問題など、様々な視点を絡ませながら迫っていくのも一つの方法かと思う。また8番目のテーマも絡ませることができるのではないかと思う。次回の会議で具体的に今期のテーマを決められれば。

次回会議日程

第3回会議

日程：令和3年11月22日（月）午後7時～

場所：中央図書館 視聴覚ホール

3. 閉会